

解答

②

傍線部で注目すべきは、もちろん疑問詞の「豈」だ。送り仮名にも「ンヤ」とあるので、反語で間違いない。「あ〜んや」と訓み、「あ〜んや〜だろっか（イヤ〜なら）」とつづ意味である。また、「不能」も大丈夫だろう。「〜（する）あたはず」と訓み、「〜できない」の意である。

これらを踏まえて傍線部を直訳すれば、「造物者はどうしてその者（≠困苦している者）が後に享受する地位をあらかじめ与え、少しでもこれ（≠困苦の状態）を救うことができないだろうか、いやできる」となる。**否定と反語が重なって、肯定の意味になることに注意しよう。**よって、「困窮をやわらげることができないはずだ」とある②が正解と判定できる。

①は「〜できない」としており、反語の意味が加わっていない。③は「予告する」、④は「将来与える」と、「予」の意味を取り違えている。傍線部では副詞で「あらかじめ」と訓む。⑤は「〜しない」が誤り。①と同様に反語の意味が加わっていない。

センター漢文以来、反語の解釈を問う問題において、**選択肢に「〜だろうか、いや〜ない」と反語の訳がダイレクトに書かれていたことはない。**また、「〜だろうか」となっているからといって疑問と決めつけるのも軽率である。現代語でも「そんなことがあるものか」と言うように、反語の用法はある。文末の形だけでなく、**解釈として成り立つかという点で判断しよう。**

選択肢チェック

☆「不能」に反語がかかって肯定

問

傍線部A「造物者**豈**不能**以**其**後**之**所**享**予**以与之、稍以拯之」とは、どのようなことを言っているのか。その説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。

反語（あに〜んや）

副詞「あらかじめ」

- ① 造物者は万能とはいえ、将来与えられる地位をあらかじめ与えて、困苦する人を救い出すことまではできない、ということ。
- ② 万能である造物者は、その人が将来に得る地位をあらかじめ付与して、困窮をやわらげることができないはずだ、ということ。
- ③ 万能である造物者は、困苦している人物に対して、将来の地位を予告することによって、未来への希望を与える、ということ。
- ④ 万能である造物者は、その労苦に見合う地位を将来与えることによって、困苦する人物を救済することも可能だ、ということ。
- ⑤ 造物者は万能とはいえ、困窮する人々を救い出して、将来における地位を彼らに保証することまではしない、ということ。

書き下し文

古より卿相達官は必ず先に困苦して後のちに乃すなはち貴たかし。何なんぞ前後ぜんごの均ひとしからざるや。其その困苦こんくするに方あたりて、造物者ざうぶつしゃ豈あに其その後のちの享うくる所ところを以もつて予あなれたで以もつて之これに与あたへて、稍やかもつ以これて之これを拯すくふ能あたはざらんや。

現代語訳

昔から大臣や高官になるべき者は必ず先に困苦して、その後のちに高い地位たいゐにつくものである。どうして先と後とで不釣り合あいなのだろうか。困苦こんくしているまさにその時に、造物者ざうぶつしゃはどうしてその者が後に受ける地位たいゐをあらかじめ与え、少しでもその困苦こんくの状態じょうたいを助けることができなだろうか（いや、造物者ざうぶつしゃにはそうした能力能力がある）。

重要語句

- 何なんぞ也 疑問形で「なんぞ〜や」と訓む。「どうして〜か」の意。詠嘆で「なんぞ〜なるや」と訓むこともあるが、本文では次の文（傍線部）で理由が述べられているので、疑問ととるべきである。
- 造物者 天のこと。古代中国では、天がこの世界の創造者であると考えられた。また、天命を受けて人民を治める者という意味で、支配者は「天子」と呼ばれた。

解答

(i) ② (ii) ⑤

傍線部でまず注目すべきは**疑問詞の「豈」**だ。「豈」が用いられる場合、大半は反語だが、(i)の選択肢を見ると、書き下し文はすべて「〜んや」となっているので、反語で間違いない。

次に、「為」に注目しよう。①・④・⑤は動詞(なる)として訓み(豈に鳥獣と為らんや)、②・③は名詞(ため)として訓んでいる(豈に鳥獣の為ならんや)。反語も合わせて後半部を直訳すると、①・④・⑤は「鳥獣となるだろうか、いや鳥獣とはならない」、②・③は「鳥獣のためだろうか、いや鳥獣のためではない」となる。

ここで(ii)の選択肢を見ると、(i)の①・④・⑤に対応するものはない。②・③に対応するものは③と⑤のみである。そこで、前半部も合わせて検討すると、(i)の②と(ii)の⑤は対応しているが、(i)の③と(ii)の③は対応していない(ii)の③には「働かせる」とあるが、使役形ではない)。よって、(i)が②、(ii)が⑤と正解は確定できる。

要するに、人間が一生懸命田畑を耕すのは、自分たちで粟や米を食べるためであって、鳥獣に食べさせるためではない、ということである。本文の最後の一文でも、やはり反語を用いて、「どうしてそれ(粟や米)で鳥を養おうか、いや養わない(奈何其以養鳥也)」と述べられている。

返り点の付け方・書き下し文と解釈の両方が問われている場合は、組み合わせを考えよう。ペアを作れない選択肢は誤りである。そうやって絞っていけば良い。

選択肢チェック

問

傍線部A「苦勤而不敢墮者、豈為鳥獸也哉」について、(i)返り点の付け方と書き下し文、(ii)その解釈として最も適当なものを、次の各群の①～⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。

(i)

- ① 苦勤而不敢墮^者、豈為鳥獸也哉
- 苦勤して敢へて墮^{おこた}らざらしめば、豈に鳥獸と為らんや
- ② 苦勤而不敢墮^者、豈為鳥獸也哉
- 苦勤して敢へて墮らざるは、豈に鳥獸の為らんや
- ③^x 苦勤而不敢墮^者、豈為鳥獸也哉
- 勤めて敢へて墮らざるに苦しむ者は、豈に鳥獸の為らんや
- ④ 苦勤而不敢墮^者、豈為鳥獸也哉
- 勤めて敢へて墮らざるに苦しむ者は、豈に鳥獸と為らんや
- ⑤ 苦勤而不敢墮^者、豈為鳥獸也哉
- 勤めて敢へて墮らざるに苦しめば、豈に鳥獸と為らんや

(ii)に対応する
選択肢がない

(ii)

- ① 勤勉に働き、なまけ心を起こさない人々は、鳥や獣に田畑を荒らされないはずだ。
- ② 人々がなまけずに働くのは、鳥や獣のように飢えたり凍えたりしないためである。
- ③ なまけがちな人々を働かせることに苦心するのは、鳥や獣を養うためではない。
- ④ 勤勉に働き、なまけようとしなない人々は、鳥や獣のように食料を奪いあうことはない。
- ⑤ 人々が苦勞して働き、なまけようとしなないのは、鳥や獣のえさを作るためではない。

反語(あに〜んや)

(i) ② | (ii) ⑤
のみ

①・②・④はA・Bどちらの解釈としても不適
Aに対応する選択肢はなし

↓どうして鳥獸のためだろうか
(いや鳥獸のためではない)

A ①・④・⑤
↓どうして鳥獸と為らんや
(いや鳥獸にはならない)

B ②・③
↓どうして鳥獸の為らんや

書き下し文

夫れ百姓牛を照して耕し、背を曝して
耘り、苦勤して敢へて墮らざるは、豈に
鳥獸の為ならんや。粟米、人の上食なり。
奈何ぞ其れ以て鳥を養はんや。

現代語訳

そもそも人々が牛を養い育てて田を耕し、背中を日にさらして草刈りをし、苦勞して働いて怠けようとしなないのは、どうして鳥獸のためであろうか（いや、鳥獸のためにしているのではない）。粟や米は人間の上等な食物である。どうしてそれを用いて鳥を養おうか（いや、そんなことはしない）。

重要語句

- 夫 文頭で接続詞として用いられる場合は「それ」と訓む。「そもそも」の意。
- 不敢 「あへて（せ）ず」と訓む。「進んでくしない」の意。
- 奈何 「如何」に同じ。文頭にある場合は「いかなぞ」と訓む。本文では、送り仮名に「ン」とあるので、終助詞の「也」と合わせて「んや」と訓み、反語となる。

解答

③

傍線部後半の「何黄之有」がポイント。「何A之有」は、反語の特別な形として覚えておきたい。「なんのAかこれあらん」と訓み、「どうしてAがあるうか、いやない」の意となる。よって、「何の黄か之れ有らん」とある③が正解と判定できる。

解釈しよう。傍線部の直前で、冥官は「蛇や牛の肝から取った黄が薬になることは、誰もが知っている」と述べている。その文脈で、「お前は人間なのだから、(蛇や牛のように)黄があるわけではない」と言ったのである。そう言われて、死罪を免れようと「私にも黄があります」と言った人は、恥じ入ることになった。

なお、傍線部前半の「為人」は、「為」が動詞として「なす」「なる」、名詞として「ため」、助動詞として「たり」「る・らる」と訓む多義語であるため、この部分の書き下し文で正解を確定することはできない。特に、慣用的に「ひととなり」と訓み、「人柄」の意で用いられるので、①を選んだ人がいるかもしれない。しかし、①は後半の「何黄之有」の部分の書き下し文が誤っている。**句法の決まった形がある場合は、それを優先して選択肢を選ぼう。**

選択肢チェック

問

傍線部A「汝為人、何黄之有」の書き下し文として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

- ① 汝の人と為り、何れの黄の有るや
 ② 汝は人の為に、何ぞ黄の之れ有らん
 ③ 汝は人為り、何の黄か之れ有らん
 ④ 汝は人を為りて、何をか黄の有るや
 ⑤ 汝の人を為むるや、何れに黄の之く有るか

何A之有 (反語)

③ 意 ① 訓 ② 意
 なんのAかこれあらん
 どうしてAがあるうか、いやない

書き下し文

獄吏一人を引きて至る。日はく、「此の人生くるとき常に人を殺すも、幸ひにして死を免る。今当に命を還すべし」と。其の人倉皇として妄りに亦た黄有りと云ふ。冥官大いに怒り、之を詰りて日はく、「蛇黄・牛黄皆薬に入ること、天下の共に知る所なり。汝は人為り、何の黄か之れ有らん」と。左右交訊ふに、其の人窘しむこと甚だしくして日はく、「某には別に黄無し。但だ些かの慚惶有るのみ」と。

現代語訳

監獄の役人が一人の人間を冥界の裁判官の前に引き連れてきて言うには、「この人間は生前に人を殺したが、運よく死罪を免れました。命をもって償うべきです」と。その人はあわてて私にも黄があると口から出まかせで言った。それを聞いて冥界の裁判官は大いに怒り、詰問するには、「蛇黄・牛黄がどちらも薬に入っていることは、世の中の誰もが知っていることである。お前は蛇でも牛でもなく人間だ、どうして黄をもっていようか」と。役人がかわるがわる問いたですと、その人は苦しくなって言うには、「私には特別に黄があるわけではありません。ただ恥じて恐れ入る気持ちがあるのみです」と。

重要語句

- 交 副詞では「こもごも」と訓む。「かわるがわる」の意。
- 某 「それがし」と訓む。一人称の代名詞である場合と、名指しせずにはかして言う場合の指
- 但 限定形で「ただのみ」と訓む。「くだけ」の意。